

平成21年5月15日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520264

研究課題名（和文） 表音文字による中国語書写の歴史的研究

研究課題名（英文） Historical Study of the Chinese Language Written in Phonetic Scripts

研究代表者

高田 時雄（TAKATA Tokio）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60150249

研究成果の概要：

本研究ではかつて歴史上に出現した、表音文字を用いて中国語を表記する幾つかの事例に関する資料を、可能な限り収集整理して、それらを中国語史の脈絡中に位置づけること、更にこれらの文字使用の性格を明らかにすることを目的とした。またこれらの資料が表音文字であるという特質によって、中国語の歴史的研究にも役立つものであることが予想されることから、整理に際してはその面にも注意をはらった。その結果、資料については幾つかの目録を作製し、資料の出現に関わる歴史的背景の知見もかなりな程度得ることが出来た。また資料の分析を通じて、これらの漢字以外の文字使用は、十分な識字率が達成されていない社会において、あくまで副次的な役割に止まるものであること、つまり漢字の不完全な代替品であることが明らかとなった。その一方でこの種の資料は漢字では窺い得ない過去の言語の音的側面を復元する上で大きな效用があることは特筆されねばならない。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	450,000	2,850,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学

1. 研究開始当初の背景

中国語を表記するのに漢字以外の文字を用いる事例は、これまでも個別的に報告がなさ

れてきており、すべてが表音系の文字であることが知られている。たとえば知られる限り最も古いものとしてチベット文字による書写

があり、これに関しては敦煌寫本中に多くの材料があって、相当に研究も行われている。また同一系統の文字であるパспа文字による書写は言語的な条件がチベット文字の場合とほぼ等しいと考えられる一方で、社会的位置づけの面では非常に大きな差異が存在する。アラビア文字による「小児錦」に関しても、近年、日本・中国・フランスなどで注目され、研究が進展しつつある。新旧キリスト教宣教師によるローマ字文献の資料は、とりわけプロテスタント宣教師のものは、時代が新しいだけに資料的にはもっとも充実しているが、宣教師の記録などさらに精査する必要がある。

要するにこれら中国史上に見られる表音文字による言語表記は、個別的な研究に関しては多かれ少なかれ一定の蓄積がなされてはいるが、それを中国語史の問題として総体的に取り扱う視点はまったく存在しなかった。

2. 研究の目的

漢字は中国語を表記するための文字として、すでに三千年以上にわたる長い歴史を持っていて、一般に中国語と漢字は切っても切り離せない存在であると考えられている。少なくとも中国語の正しい書記形態は漢字によるそれであるという通念は全く揺るぎないと言ってよい。近い過去の一時期、拼音字母がやがて漢字に取って代わる可能性が論議されたことがあるが、それも今日ではほとんど聞かれなくなったし、実際においても拼音文字の役割は補助的なものに留まっている。では中国語と漢字の関係はどの程度まで密接不可分のものであろうか？中国語は漢字によって書かれるのでなければ、十分にその意味を表現し得ないのであろうか？漢字以外の表音文字で表記された中国語は、結局のところ何故大きな成功を収めることが出来なかったのか？本研究はこのような問題に対して初歩的な解答

を与えるために、表音文字による中国語書写の歴史を辿り、言語的及び社会的両面からその特質を探ることを目的とする。

3. 研究の方法

以上の目的を達成するためには、歴史上、漢字以外の文字によって中国語が表記された事象は具体的にどれほどあり、いかなる歴史的背景を有し、どの程度まで普及したのかという点を網羅的に調査する必要がある。本研究では、資料として一定のコーパスを確保し得る以下の四つの事象について、それぞれの歴史的経緯を検証する。

- (1) 九・十世紀の敦煌及び河西地域で行われたチベット文字の使用
- (2) 1269年元朝によって正式に国字として公布されたパспа文字の使用
- (3) 元明以降、回族により用いられたアラビア文字による「小児錦」あるいは「小経」
- (4) 新旧キリスト教宣教師によって導入されたローマ字の使用

以上、歴史上に行われた四つの事例を基礎として、本研究では主として以下のような問題を提起し、その解答を得たい。

- (1) 漢字を用いることなく、ことさらに他の表音文字を用いた理由は何であったか？またその際、別に漢字を学習する条件が与えられていたか否か？
- (2) 当該文字による書写の範囲はどれほどであったか？書信などの私的な文書に留まっていたか、あるいは公的文書も書写されたか？
- (3) 同一の文字による書写を実践するコミュニティはどれほどの規模であり、且つどれほどの安定性をもつ存在であったか？
- (4) 当該文字によって中国語の音韻を過不足無く正確に表記し得たか？

4. 研究成果

上記の4つの事象について研究した暫定的結論を以下に記す。

(1) 八世紀の八十年代に中国西北の河西地域は吐蕃(チベット)に占拠され、その後七十年ほどの間吐蕃の支配が継続する。その期間チベット語・チベット文字が公的な地位に置かれ、社会の様々な場面に浸透したことから、この地の漢族の一部では次第にチベット文字で自身の言語を書き写すようになった。しかしチベット文字の使用は敦煌の漢族社会全体にひろく伝播することはなく、ごく一部に限られたと思われ、やがて歴史に埋もれてしまうこととなった。この時代の中国、とくに敦煌のような辺境地方では、漢字の識字率が極めて低いレベルに止まり、大部分の非識字層では文字使用による恩恵を享受できずにいた。一方、表音文字であるチベット文字はわずか三十文字の習得で文字の使用が可能になるため、漢字を使えない人々の中にこのような現象が生じたのは理解しやすい。しかし重要な点は、このようなチベット文字の使用が漢字の権威と優位性になんらの動揺をも与え得なかったことであろう。チベット文字は畢竟、漢字を十分に習得していない、あるいは全く漢字を知らない漢族の便宜的な文字使用に過ぎなかったといえよう。いずれにせよこのチベット文字による漢語書写の試みは、現在知られる限り最も古い事例である。

(2) パスパ文字は元朝の国師であったパспа(パクパ・ラマ、'Phags-pa bla-ma)によって作られ、至元六年(一二六九)、国字として公布された。この文字はモンゴル治下の一切の言語を書写すべく構想されたものであったが、実際にはモンゴル語の他には漢語を初めとする幾つかの言語の標本が残っているにすぎない。パスパ文字は一方的に上から与えられた文字である。したがって今日残

されている漢語を表記した材料も、聖旨碑をはじめとする公的な碑文に記されたもの、さらには官印や紙幣、銭貨、さらに銅権(はかりの錘)などであって、すべてが色濃く公的な性格を帯びたものであることに注意すべきである。敦煌のチベット文字文献のように、パспа文字だけで漢語を表記したものはほとんどないと言って好い。つまりパспа文字が国字であるかぎり一応の敬意を払ってそれで書いておくと、パспа文字だけでは理解に不便であったため、漢語をも併記せざるを得なかったというのが実際と思われる。官製のお仕着せ文字であったために、パспа文字は元朝の瓦解と共に公的な地位を失ったが、意外にも限られた範囲内でかなり長く命脈を保ったことが知られている。私印の世界で印章の文字として用いられた場合があり、我々は後世にもしばしばパспа文字を刻んだ印章を眼にすることが出来る。しかしこれは趣味的な意匠に関わる問題であり、本来の文字の世界とは関係がない。

(3) イスラーム圏では例外なくコーランと同じアラビア文字が用いられている。したがって中国のイスラム教徒である回族がアラビア文字を使用するのはきわめて自然である。中国各地の回族のあいだでは、小児錦(或いは小経)と呼ばれるアラビア文字による漢語書写がかつて広範囲に行われていたし、現在でもなお使用されている。しかしこれも所詮は便宜的な表記のレベルを出るものではなく、また当然ながらイスラム教徒の枠を超えることはあり得ないことからすれば、かなり特異な例として扱わざるを得ない。

(4) カトリック宣教師の場合とは異なり、ロテスタント宣教師たちは早い時期からローマ字で中国語方言を表記するシステムの開発に取り組んだ。彼等は漢字に代わって中国語を表記する新しい文字としてローマ字

による一貫した表記システムを作り出した。その中で最も成功を収めたのは閩南語に適用された教会ローマ字である。長老会 (Presbyterian Mission) の宣教師たちは廈門でこの表記システムを積極的に教育に採用し、ローマ字によって中国人改宗者に日常の言語を書き表すことを勧めた。別名を白話字ともいうように、教会ローマ字は漢字とはまったく独立して閩南方言を表記するもので、そのため語を単位とする分かち書きを採用している。この教会ローマ字は閩南語圏の教徒のあいだでは極めて広範囲に用いられ、特に台湾では盛んであり、紆余曲折を経てその使用は今日でも継続されている。教会ローマ字の場合は、漢字の存在を前提とせず独立して中国語を表記するための文字としての強い指向性をもっており、他の表音文字が副次的なレベルに止まったのとは一線を画しているともいえ、今後の展開を注視すべきではあるが、大幅な飛躍は望み薄である。

以上是非漢字の事例の幾つかを見たわけだが、いずれも漢字の優位を覆すほどの条件を備えたものは存在しなかった。またパスパ文字の事例を除いて、多くの場合、その担い手は何らかの理由で漢字に習熟するに至らない、社会の下層乃至辺縁部に位置する人々が漢字の代用として用いたものである。強固な宗教的動機が存在する場合を除いて、条件さえ許せば彼等は漢字の学習を望んだと思われる。三千年に及ぶ漢字の歴史は中国文化の統合のシンボルであり、漢字の使用を維持することに対する無言の圧力が存在する。また漢字という文字は、その独得の表語的性格のおかげで、方言の相違を克服して、中国社会を統合する実用的機能を果たしている。

字数の多さと構造の複雑さによって、中国では漢字の識字率が相対的に低いレベルに止まっていたため、歴史上、小文で見たよ

うな漢字以外の文字使用が間々行われることにもなった。しかし職業ごとに必要不可欠な数だけの漢字を習得しておれば十分と見なす機能的識字 (functional literacy) という考え方もあり、その場合には清朝期の識字率は決して低くなかったとする学者もある。いずれにせよ清朝末期から今日に至るまでの百年間に、識字率は目に見えて向上したことは間違いないし、簡体字の導入によって一層広い範囲の人々に文字使用が拡大したことも事実であろう。三千年の歴史を受けて、漢字使用は確実に伝承され、発展しているといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①高田時雄「敦煌遺書與漢語史研究」『敦煌研究』2006年6期、136-138頁、査読有

②TAKATA Tokio A Note on the Lijiang Tibetan Inscription, *Asia Major* Vol. 19, pt. 1/2, pp. 161-170、査読有

③高田時雄「敦煌的識字水平與藏文の使用」『轉型期的敦煌學』2007、599-615頁、査読有

④高田時雄「金楷理傳略」『日本東方學』第1輯、260-276頁、査読有

⑤高田時雄「非漢字から見た漢字文化」『月刊言語』36-10 (2007)、48-55頁、査読無

[学会発表] (計 2 件)

①高田時雄「シルクロード漢字文化の東西」“漢字文化三千年” 國際シンポジウム、2007年12月12日於京都大学

②高田時雄「搖籃時代的歐洲漢語課本」“16-19世紀西方人的漢語研究” 2007年10月6日於関西大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 時雄 (TAKATA TOKIO)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60150264

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

